年三月二〇日
野地
蔵の頭をな
づる枝垂れ梅
愛

老夫婦初音に鍬を休めをり	摘むことの出来ぬ古墳の土筆かな	春匂ふ緑インクのエアメール	一両車いまし野梅の窓となる	チューリップ風車の丘を埋め尽くし	里山は近くて遠し木の芽道	正門に十五の春を送り出す	城跡の空濠埋む落椿	佐保姫をいざなふ寺のライブかな	春雨や合羽目深に渡し守	靴先に春塵乗せて配達夫	逝きし人辛夷の空に悼みけり	二〇二一年三月二〇日
か か し	小袖	素	うつぎ	せいじ	愛正	小袖	宏虎	凡 士	素	素	よ う 子	
					毎週句会秀句・みのる選・二〇二一年三月二一日		山笑ふ麓の竹にくすぐられ	卒寿翁感謝のことば暖かし	置きざりに見開き雑誌春炬燵	つくしんぼ袴脱がされ裸んぼ	掛筒の椿一花に座の和む	野地蔵の頭をなづる枝垂れ梅
					二月二一日		菜々	わ か ば	小袖	は く 子	わ か ば	愛正

廃 線 に 朽 ち l 駅 舎 や Щ 笑 Z

なつき